

哀切と痛切

小栗康平

著者紹介／おぐり・こうへい
1945年，群馬県前橋市生まれ，
映画監督。'81年に『泥の河』
を，'84年に『伽椰子のために』
を発表する。

哀切と痛切 定価一六〇〇円

一九八七年一月二十日第一刷

著者 小栗康平

発行者 原田奈翁雄

発行者 径書房

東京都千代田区三崎町二―十三―五

編集〇三―二三四―四六〇八

営業〇三―二六三―七〇一九

振替東京一―三二七二六

印刷所 京美印刷（平版）

明和印刷（活版）

製本所 積信堂

哀切と痛切

小栗康平



径書房

●カバ―・表紙デザイン 木下勝弘

哀切と痛切●目次

*

許しのもとに

赤亀橋

あじさい

彼氏と彼女

枕低う

通俗を刺して

全国電化

カットの空白

ねじれ

部分と全体

動きの発端

きつちゃん

Ｊさんへ

10

12

15

19

22

29

36

39

43

47

53

59

64

ピロスマニ	67
ポーランドの人々	74
伽倻山のふもと	79
日本人であること	83
主役公募	87
音の人	91
監督の台本	97
後遺症	101
海を渡る	104
父の表情	108
定かでなく	116

個人的事情

両の眼

見ることの過剰

正面の顔

二度目のモスクワ

哀切と痛切

クローズ・アッブ考

いのち

句読点

サドウル賞

歴史の通路

167 163 157 154 150 146 140 136 131 128 124

哀切と痛切

許しのもとに

第一回作品であることの意味を己れの内ですたせればと、そんな思いで夜陰にまぎれてひっそり出立したはずが、妙に強い陽差しのもとに迷い出てしまった。

思えば高校時代、最初に映画に魅かれていったときのあの暗闇の充足感は、いまでも私の大事な部分を支えていてくれるような気がする。当時私は、それはスクリーンのこちら側だけの謂わば一観客の貧乏性な生理で、神秘にも近い映像の構築は田舎者が想像だに出来ない豊かさによって支配されていると思った。映画は、スクリーンという大写しの機能ゆえに性来派手好きな性向を持っていたのであるから、それは無理からぬことだった。

しかし、長じて幸運にもこうして一本撮ることが出来たとき、身に沁みて思うことは、撮影時においてもまた、映画のあらゆるカットは暗闇に守られている、ということだった。

現実において、出来ることなら人々の失意や悲嘆にぶしつけなまなざしを注ぐまいとする
その同じ私たちが、映画において人の姿と感情をまじろぎもせず凝視できるのは、暗闇に
我が身を隠しているという大きな許しのもとになされているからではないのか。そういえ
ばスクリーンというものがあのようにくつきりとした四角い形をもつのも、芝居という露
な感情に触れるがゆえに、その世界を曲線ではなく、直線の規矩きくによって仕切りたいとい
う、私たちの心弱い願望の反映ともとれるのである。それは有限であることを知る人間の
悲しみや優しさへの懸命な処方なのだと私には思える。

白日の下にも夜がある。その夜に身を潜めて、私もまた映画を撮ることが出来たといえ
るだろうか。

赤亀橋

私の郷里、前橋の町なかを利根川から分かれた広瀬川が流れている。

生家が裕福だった萩原朔太郎は、デカダン象徴派詩人として、モダンボーイの憂鬱を胸にその川べりを徘徊していたらしい。その広瀬川がもう一度分かれて川幅を狭めた近くに、赤亀橋あかかめばしという名ばかりを石に残した、粗末な橋があった。私はその橋を往き来して育った。私の家は文具商であった。細心というより小心な父は、冬の赤城嵐あかしのからっ風がどんなに吹きすさばると、店のガラス戸を閉めなかった。戸が閉まっていると、客が入りにくいという理由である。

家族営業の小さな店だったから、食事のときも別に店番の人がいたわけではなかった。お客さんが来れば家族が交代で立てるように、店内を見わたせるところでみんなが食事を

した。外からも丸見えである。そこを風が吹き抜けた。私は子供心にも自分の家族は往来に晒されているのだと思っていた。

父は朝鮮からの引揚者で、何年か行商のようなことをして店の手がかりをつかんだ。最初の店は一坪にもみたくない玄関だった。何本かの鉛筆がコップに立てられ、ノートが一冊ずつ平らに並べられた。お客が小さな門をあけて入ってきた。私は何歳だったのか、ままたのようなそのときの店の光景が、いつまでも至福なままに私の中にある。

高校に入って好きな人ができた。その人の家を訪ねるたびに門をあけ玄関をあけた。門から玄関までのわずか五歩か六歩の自分の足どり、そして戸をあけてその人が出てくるまでのちょっとした静まり、それがひどく恥ずかしかった。

そんなふうだったある日、私は小学校のときから通い慣れていた赤亀橋の上で釘づけになってしまったことがあった。十何年間いつも見ていた川沿いの家々の、なんでもなかったずまいが、痛いような人恋しさで胸に迫ってきたのである。

粗末な家々であったが、それでも道路に面した側は、まがりなりにも居住まいを整えている。しかし、川に面した側は、まったく無防備とっていいほど雑然としたままだった。川の側は防犯のうえからも戸締まりすら必要ないのかもしれないが、人が川に向かっ

て心を許しているように、私には思えた。

父は帳面の十円の金が合わなくても何時間でもソロバンをはじいている人だった。爪に火をともしようにして店を育てた。玄關はほどなくして壊され、店は庭先へ出た。そして柿の木が切られ、門がなくなった。私の成長は家が往来へせり出ていくことだった。

往来に晒されて恥ずかしいのではない。ただ、どこかで拭いがたく悲しいのである。川沿いの家々の、くつきりとした二つの表情が私にそう思わせた。

その後、二十歳で父を失い、二十代から三十代への、時間のかかったにぶい日々、私はまた、その赤亀橋から一つの風景を知った。川べりにたわなに咲き乱れたあじさいの花が、その重さに頭を垂れて、わずかに川の流れに触れながら、動いているのである。

美しく、そして不安だった。それもまた、目の離せない、私のなにかだった。小さな赤亀橋の上で、私の感情が少しずつ具体的になっていった。

あじさい

この夏、古い白黒テレビが壊れてしまったが、ひいきとする中日の負けがこんでいたこともあって、すぐに新しいものに買いかえる気もなく、半年あまりほうっておいた。つい最近、値段は四万円ほどであったが、生まれて初めて自分からカラーテレビを買い求めたとき、私はひどくせいたくな気分になった。金額からすればとりたてて高い買物ではない。それより、お金を出してそうしたものを自分のものにするに、どこか身にそぐわない思いがついてきて、ぜいたくなのである。私はこれに似た感情をかつて一度だけ味わったことがあった。

それは、生まれて初めて八ミリのカメラというものを手にしたときだった。アルコというメーカーで三本ターレットのカメラだった。当時、私にもうつせまずというコマー